大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の調査成果

藤原　正大（横手市教育委員会）

Ⅰ. 調査要項

遺跡名　　:大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（おおしみずⅠ・Ⅱ・Ⅲいせき）
所在地　　:秋田県横手市平鹿町浅舞字大清水
調査原因　:浅舞北部地区農地集積加速化基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
調査面積　:4,450 ㎡（大清水Ⅱ遺跡　1,010 ㎡　大清水Ⅲ遺跡　3,440 ㎡）
　　※工事立会面積　25,450 ㎡
　　（大清水Ⅰ遺跡　9,800 ㎡　大清水Ⅱ遺跡　9,790 ㎡　大清水Ⅲ遺跡　5,860 ㎡）
調査期間　:令和 3 年 5 月 10 日～8 月 6 日
調査協力　:秋田県平鹿地域振興局農林部農村整備課・秋田県雄物川筋土地改良区
　　有限会社高健興業・株式会社半田工務店・株式会社最上田組
調査指導　:秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室・秋田県埋蔵文化財センター
調査主体　:横手市教育委員会教育総務部文化財保護課

Ⅱ. 遺跡の立地と調査の概要

大清水（おおしみず）Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡（いせき）は、JR 横手駅から西約 8km、横手市役所平鹿庁舎から北西約 2.5km の農免農道（旧横荘線線路）沿いに位置します。遺跡の東側には樽見内集落、西側には蛭野集落があります。現在、3 つの遺跡の中央には「大清水」と呼ばれる湧水があり大きな柳の木が目印となっています。菅江真澄は文政 7 年（1824）に平鹿郡を訪れ、『雪の出羽路』でこの「大清水」について以下のように記述しています。

「大清水、此大清水の流れをぬる川といふ。水の屯寒（ぬるき）事にはあらず、その行く川水の疾（はや）きからぬをしか方言（いふ）るなり。大清水は角間川の水上にして浅舞の西に在り。」

（大清水、この大清水からの水の流れのことを「ぬる川」とも言う。水のぬるいことを言うのではなく、その水流が速くないことを言う呼び名のようである。大清水は角間川の上流で、浅舞の西にある。）

遺跡の東約 1km には皆瀬川から取水する大宮川が北流するほか、昭和 23 年（1948）に米軍によって撮影された航空写真には多数の蛇行する小河川が確認できます。遺跡はこのような小河川によって形成された沖積低地上の微高地に立地します。

この一帯には、もともと縄文時代の遺物散布地として周知される「大清水Ⅰ遺跡」と「大清水Ⅱ遺跡」がありました。昨年 12 月には浅舞北部地区農地集積加速化基盤整備事業が実施されるのに先立って、遺跡の正確な範囲や有無を確認する分布調査を実施しました。その結果、上記 2 つの遺跡範囲がこれまでより広がることを確認したほか、新たに農免農道沿いの平安時代の遺物・遺構が広がることがわかり、

「大清水Ⅲ遺跡」としました。大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の面積はあわせて 29,900 ㎡にものぼります。

以上の分布調査の結果を踏まえ、横手市教育委員会は事業の実施に先立って開発者と協議を行い、水路の布設や新田面の高さ調整のため遺跡が消滅してしまう 4,450 ㎡について 5 月初旬から 8 初旬までの約 3 か月間にわたり発掘調査を実施することになりました。また遺跡を盛土等で保護できる範囲については工事立会を行いました。この発掘調査の結果、大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は縄文時代後晩期と平安時代の複合遺跡であり、特に平安時代(9 世紀代～10 世紀初頭、いまから約 1200～1100 年前)の集落を主体とする遺跡であることがわかりました。

Ⅲ. 周辺の遺跡

大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の周辺には、当該遺跡と同様に中小河川がつくりだした微高地上に縄文時代から中世までの遺跡が点在しています(図 1、2)。なかでも大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の主たる時代である平安時代には、当該地一帯は平鹿郡域に属しており、横手盆地北部の大仙市・美郷町(旧山本郡域)に払田柵が造営されるのと軌を一にして盆地内で最も遺跡数が増加します。また、平鹿郡東部、現在秋田自動車道が横断する中山丘陵には、古代の代表的な土器である須恵器を生産する窖窯(あながま)が多数築かれ、東北有数の生産地として知られています(中山丘陵窯跡群)。この時期の周辺の遺跡は平鹿町樽見内の砂子田遺跡(すなごだいせき)や雄物川町会塚の会塚田中B遺跡(あいづかたなかいせき)、同沼館の正願谷地遺跡(しょうがんやちいせき)、同東里の水尻遺跡(みずじりいせき)・柄内遺跡(からうちいせき)などがあり、いずれの遺跡も複数の掘立柱建物跡や竪穴建物跡などから構成される集落跡です。

また、遺跡の西約 3.5km には今回の公開講座で取り上げる、秋田県内で奈良時代の遺跡が最も集中する「造山遺跡群」が展開しています。

Ⅳ. 調査の成果

1　大清水Ⅱ遺跡の調査成果（図 3）

(1) 検出遺構と遺物

遺構: 竪穴建物跡 1 軒、掘立柱建物跡(柱穴 410 基)、土坑 32 基、溝跡 14 条

遺物: 縄文土器、石器、土偶、土師器、須恵器

(2) 主な調査成果

① カマドをもつ竪穴建物跡

調査区北側で、平安時代の竪穴建物跡 1 軒(SI01)を検出しました。長軸 5.5m、短軸 5m の北東から南西方向に長い竪穴建物跡で、建物跡の東隅にはカマドが設けられていました。カマドは粘土でアーチ状に構築されていたと想定されますが、天井が崩壊した状態でした。煙道は建物外まで延びるもので横手盆地でも一般的に見られるものですが、建物の中に造りつけられるカマドは、燃焼面(煮炊きのために火を焚いた面)から煙道までが水平とならず、段をつけて煙道につながっている横手盆地ではあまり類例のないタイプです。

また、カマド内部には煮炊き用の甕を支える石製の支脚が 2 つ並んでおり(一方は支脚が据えられていた痕跡のみ)、「二つ掛け横並び」のカマドであったことがわかりました。

建物内からは土器類が多量に出土し、住居の床面直上からは須恵器杯(すえきつき)(底部ヘラ切り後無調整)・高台付杯(底部回転糸切り後無調整)・双耳杯・長頸壺などが出土しています。

特に須恵器双耳杯は前述の砂子田遺跡で出土例がありますが(横手市教育委員会 2006a)、基本的に

大清水Ⅱ遺跡のような集落遺跡での出土例は少なく、宮都（きゅうと）や地方の役所跡（官衙（かんが））、寺院などで出土する傾向があるとされています（上野 2013）。生産地の中山丘陵窯跡群では、9 世紀前半に須恵器生産を行った横手市赤坂（秋田ふるさと村周辺）の富ヶ沢Ｂ窯跡で類似したものが出土しています（秋田県教育委員会 1992）。以上のような出土遺物の特徴から、建物跡の年代は 9 世紀前半頃と考えられます。

② 縄文土器が一括で出土した土坑

今回の発掘調査では、縄文時代の住居などの建物跡は検出されませんでしたが、調査区中央で検出された土坑からは縄文時代後期末～晩期初頭頃のものと考えられる深鉢や注口土器などの縄文土器がまとまって出土しました。また、別の土坑からは土偶の脚部が出土しており、縄文時代にもここ一帯が利用されていることがわかりました。今後整理作業を進め、出土遺物の年代や当時周辺がどのように利用されていたかなどを詳しく検討していきます。

2　大清水Ⅲ遺跡の調査成果（図 4）

（1）検出遺構と遺物

遺構：竪穴建物跡 2 軒、掘立柱建物跡（柱穴 115 基）、土坑 35 基、溝跡 2 条

遺物：縄文土器、土師器、須恵器、石器、水晶切子玉

（2）主な調査成果

① 特殊な構造をもつ 2 軒の竪穴建物跡

大清水Ⅲ遺跡の発掘調査では、平安時代の竪穴建物跡 2 軒（SI05 と SI84）を検出しました。竪穴建物跡の年代は、出土した土器の年代から 9 世紀後半～10 世紀初頭と考えられ、今後詳しく検討が必要ですが前述の大清水Ⅱ遺跡 SI01 竪穴建物跡よりやや年代が新しいようです。発掘調査から、これらの竪穴建物跡は、横手盆地ではあまりみられない特殊な構造をもつことがわかりました。

SI05 竪穴建物跡は、長軸 3.1m、短軸 2.7m の南北にやや長い小型の竪穴建物跡です。北側には長煙道をもつカマドがありますが、このカマドが建物跡から飛び出して造られている点に特徴があります。このような構造の竪穴建物跡は秋田県北部の米代川流域に類例があることを雄勝城・駅家研究会代表の高橋学氏からご教示をいただいています。この構造の竪穴建物は前述の正願谷地遺跡でも見られます（横手市教育委員会 2006b）。このカマドは前述の大清水Ⅱ遺跡の竪穴建物跡と同様に崩壊していましたが、煙道部からは土師器杯が伏せられた状態で出土しており、竪穴建物の廃棄にあたって儀礼が行われたと考えられます。この建物跡からは 9 世紀後半～10 世紀初頭の須恵器・土師器が出土しているほか、建物内の土坑からは、「伴」と墨書された須恵器杯が出土しています。「伴」墨書土器は、秋田市秋田城跡や大仙市・美郷町の払田柵跡といった城柵遺跡のほか、墨書土器が大量に出土した横手市清水町新田に所在する手取清水遺跡（てとりしみずいせき）など、いまのところ県内 8 遺跡で出土例が確認できます。

一方で、SI84 竪穴建物跡は一部を暗渠によって壊されていましたが、長軸 4.3m、短軸 4.2m（推定）のほぼ正方形の竪穴建物跡で、建物内の床面は丁寧な貼床（土間のようなもの）が施されています。SI05 竪穴建物跡と同様に、南側に長煙道のカマドをもち、カマド内からは土師器甕が出土しました。この竪穴建物跡には、40～50cm ほどの比較的大きい掘方をもつ掘立柱建物跡が重複していました。この掘立柱建物跡が竪穴建物跡と一体のものか、もしくは竪穴建物跡が使われなくなった後に建てられたものなのかは今後検討が必要ですが、横手市杉沢に所在する前通遺跡（まえどおりいせき）でも同様の事例が確認され、掘立柱建物内に竪穴を取り込んだ一体のものと考えられています（秋田県教育委員会 2003）。また、この掘立柱建物の柱穴柱掘方のひとつからは水晶切子玉が出土しました。

② 竪穴建物跡周辺の土坑群

2 軒の竪穴建物跡の周辺からは多くの土坑が検出されました。土坑からは竪穴建物跡と同様に 9 世紀後半～10 世紀初頭頃の土師器や須恵器が大量に出土しました。この土坑群も用途等について今後さらに検討が必要ですが、竪穴建物跡周辺に集中していることを考えれば、現時点では建物の貼床やカマドなどを構築するための土取り穴としてや、当時の人々の生活の中で出たゴミ（使用した土器など）を廃棄するための塵芥処理に利用された可能性が考えられます。

Ⅴ. まとめ

上述の通り、大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡は平安時代を中心とする集落遺跡であり、現在までの検討の結果、小河川によって形成された沖積低地上の微高地に集落が展開していることがわかりました。発掘調査では大量の平安時代の土器が出土するとともに、竪穴建物跡を複数棟検出し、特徴のある建物の構造やカマドの造りをしていることがわかりました。これらがなにを意味するかは今後整理作業を進めて検討していきますが、大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡で集落が営まれた同時期には、元慶（がんぎょう）二年（878）に秋田城下で出羽国最大の蝦夷の反乱である「元慶の乱」が起こったことが『日本三代実録（にほんさんだいじつろく）』に記録されています。元慶の乱を契機にして横手盆地でも建物構造の変化や集落遺跡の増加がみられることが指摘されており、このころ大規模な人口の移動があったことが考えられています（島田 2016）。大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡のバラエティに富んだ竪穴建物跡の構造も、このような平安時代横手盆地の社会変化を反映している可能性もあり、様々な可能性を考慮して整理を進めていきますので、地域の皆様をはじめとして、多くの皆様からご指導・ご支援をよろしくお願いいたします。

参考文献

上野章 2013「双耳杯（椀）の分布と変遷を中心にして」『大境』32　pp.17-44
内田武志・宮本常一 1976『雪の出羽路　平鹿郡』菅江真澄全集第六集　未来社
秋田県教育委員会 1992『秋田ふるさと村（仮称）建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
秋田県文化財調査報告書第 220 集
秋田県教育委員会 2003『前通遺跡』秋田県文化財調査報告書第 351 集
島田祐悦 2016「出羽山北三郡と清原氏」『前九年・後三年合戦と兵の時代』吉川弘文館　pp.79-116
横手市教育委員会 2006a『砂子田遺跡』横手市文化財調査報告第 1 集
横手市教育委員会 2006b『正願谷地遺跡・下作の瀬遺跡』横手市文化財調査報告第 6 集

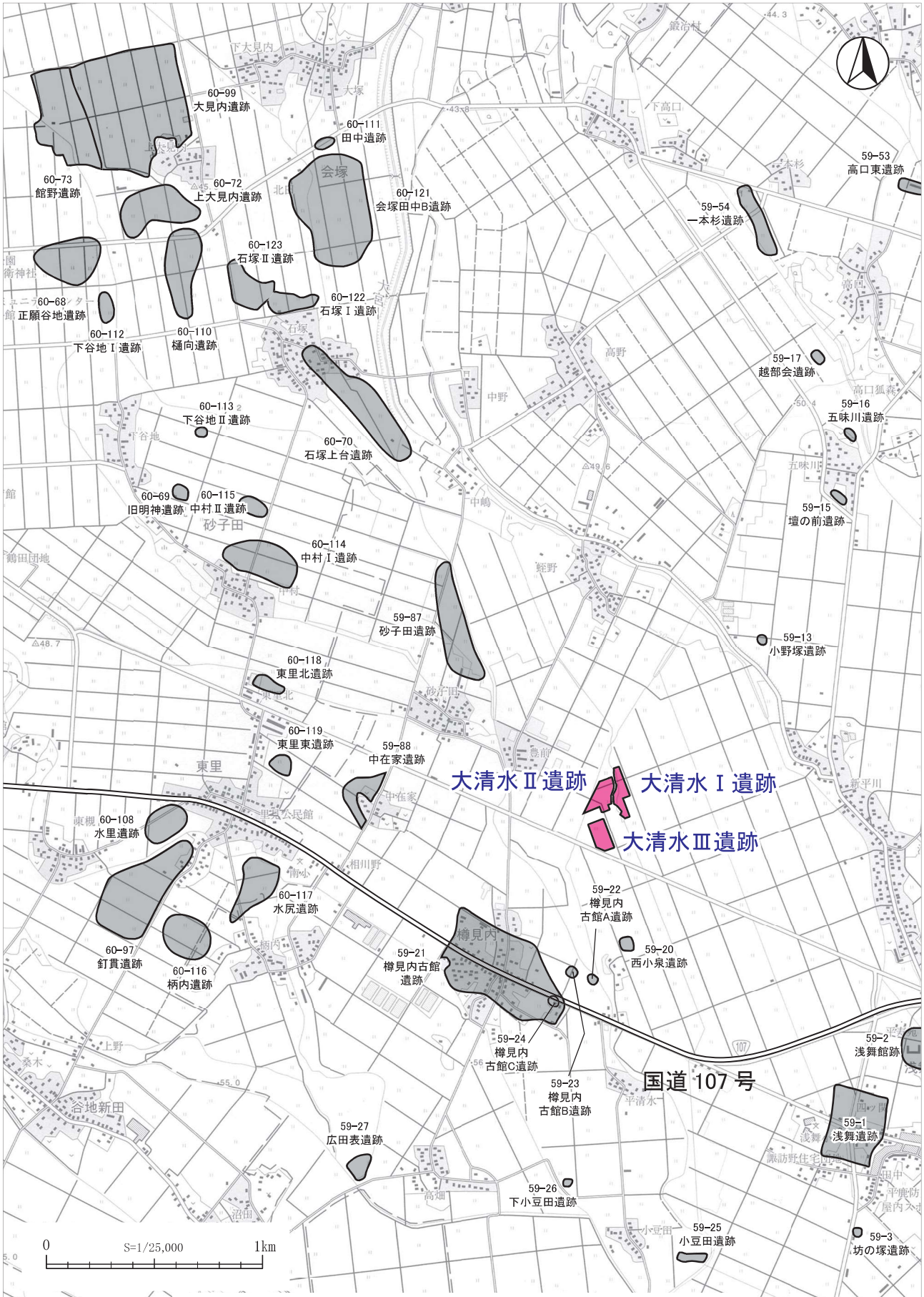

図１　大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡と周辺の遺跡分布図

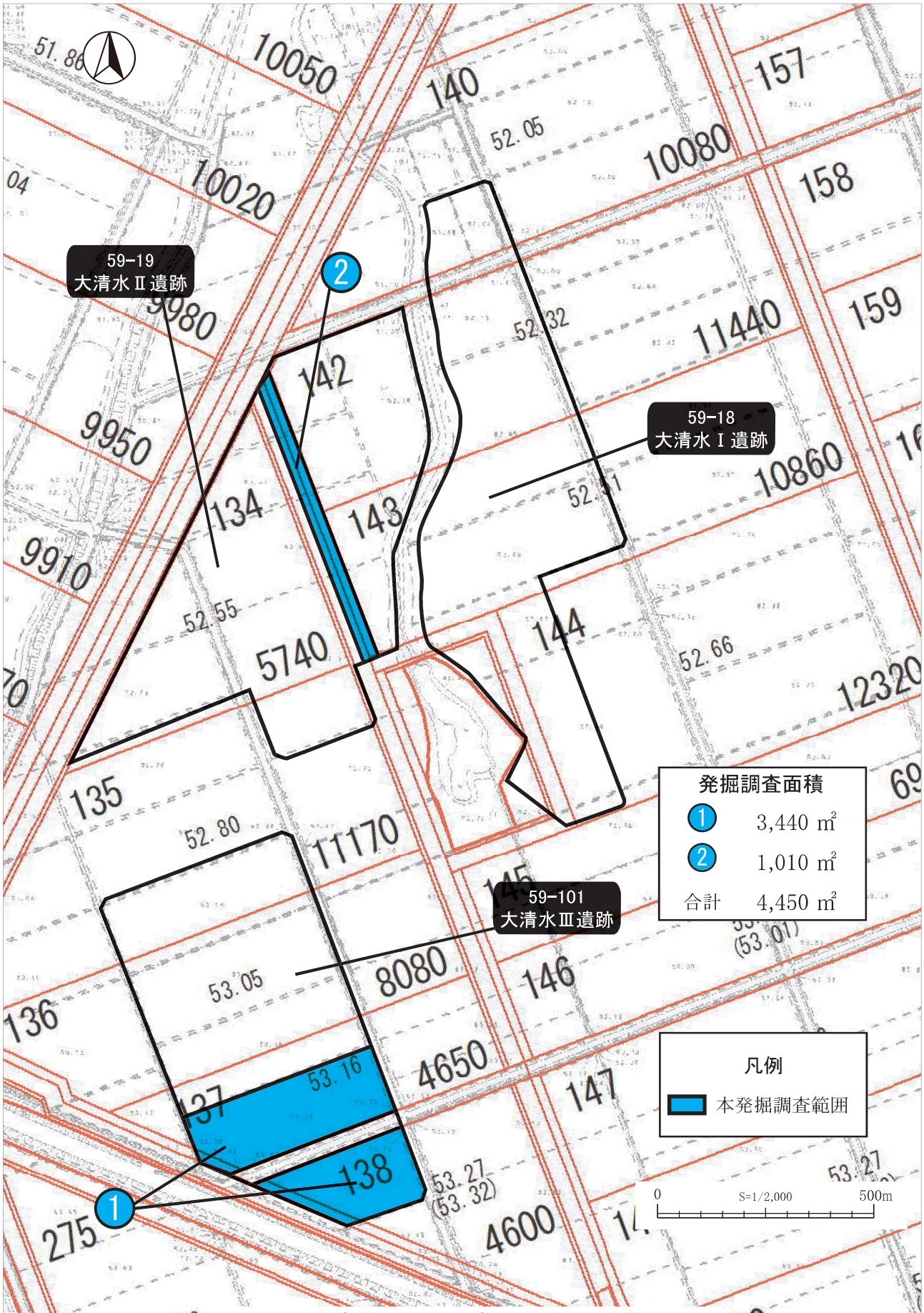

図２ 大清水Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡 発掘調査範囲

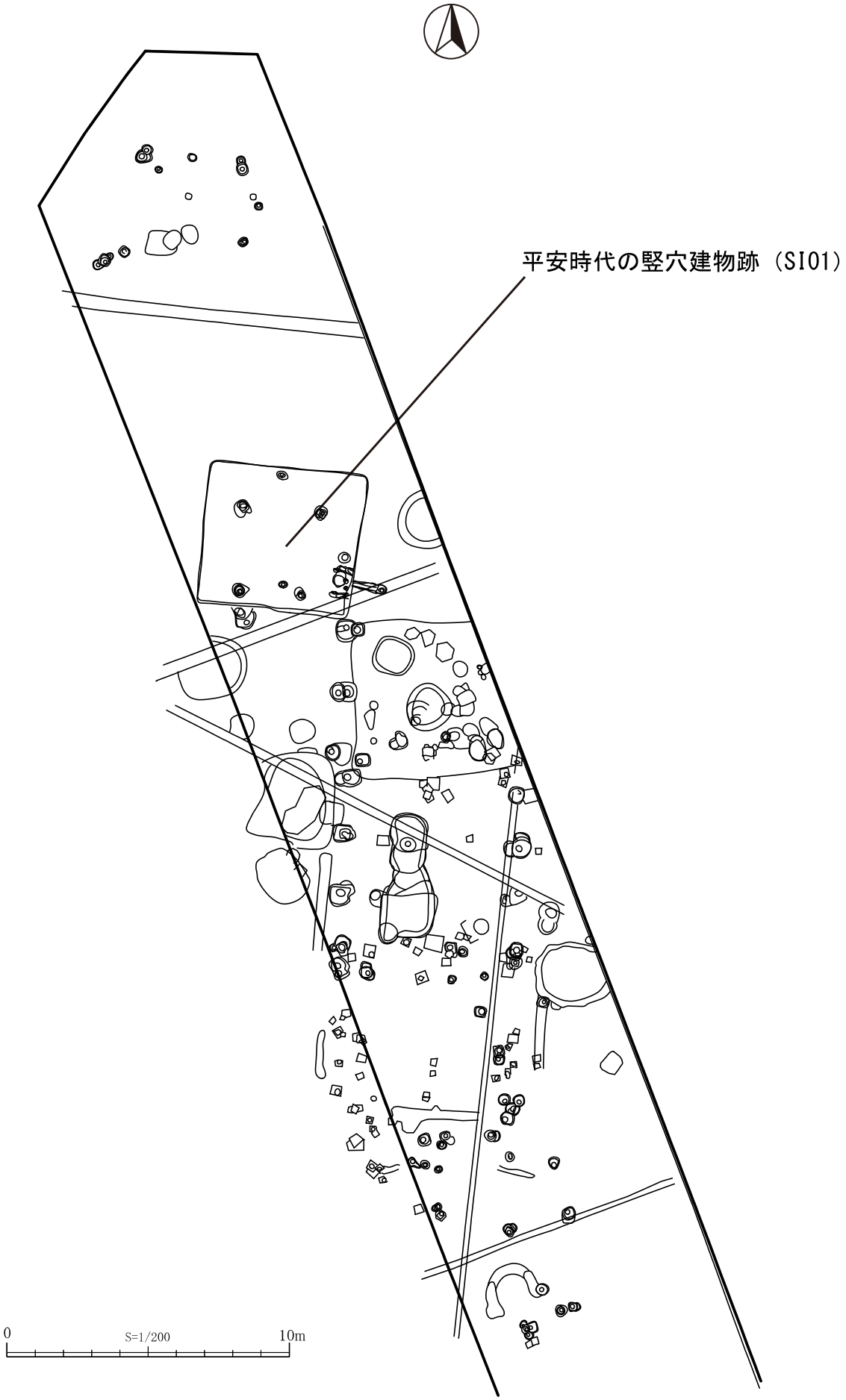

図 3 大清水Ⅱ遺跡 遺構配置図（北側のみ）

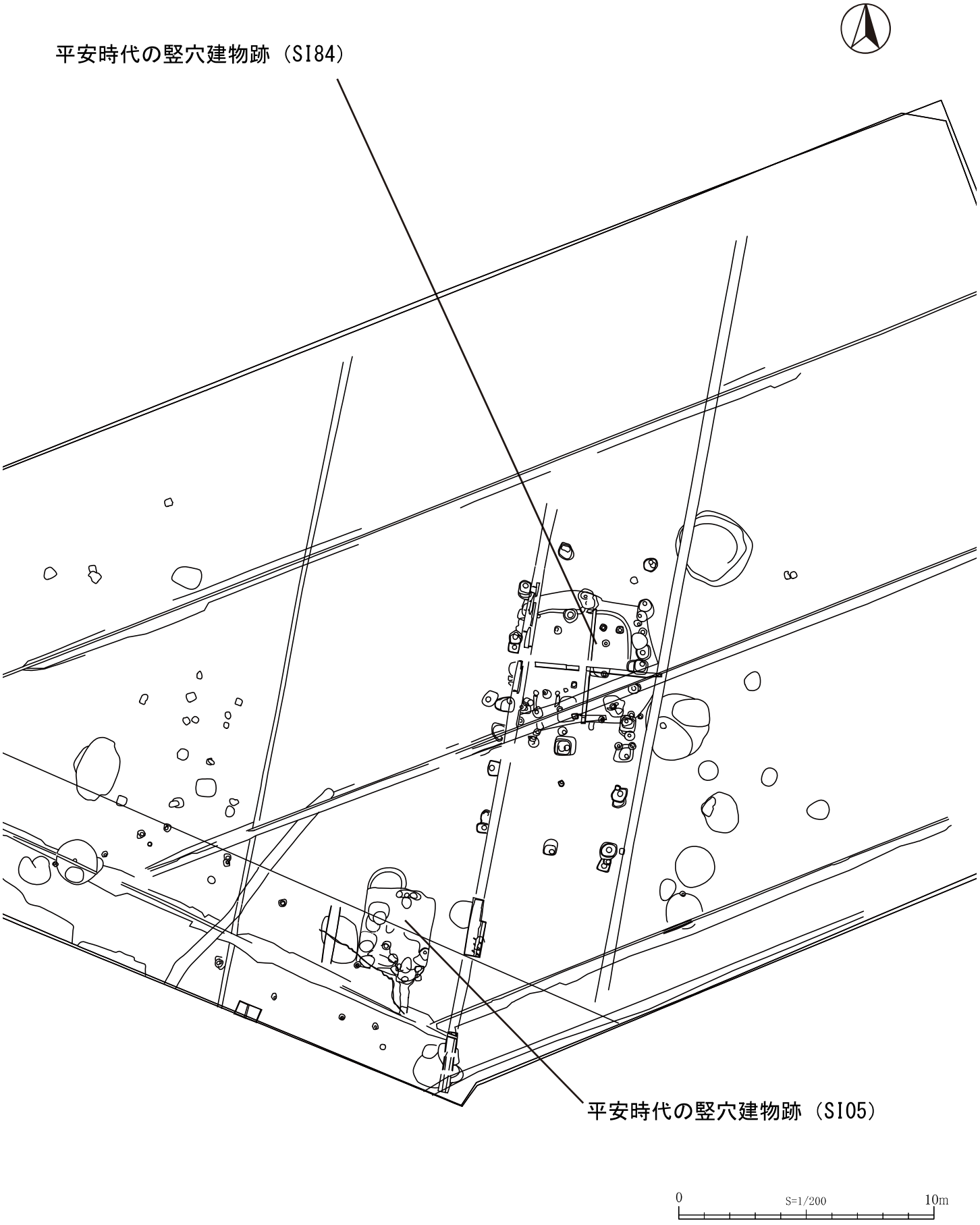

図４ 大清水Ⅲ遺跡 遺構配置図（南東側のみ）